開発の現場から

フィリピンの最貧困層出身の青少年たちが切り拓く未来
人財育成の循環に取り組む草の根活動奮闘記

中村八千代/中村冴子
NPO 法人ユニカセ・ジャパン

最貧困層出身の青少年たちが社会参画し、経済的・精神的に自立を遂げ、さらには未来の子どもたちに「貧困の負の連鎖」を引き継がぬよう、貧困の当事者たちが「ロール・モデル」として次世代を育成する—そのような循環によって貧困を削減し、ユニカセのビジョンである**「子どもたちが安心して暮らせる社会の実現」**を達成するため、フィリピンと日本で私たちは活動を続けている。

フィリピン・マニラ首都圏における「貧困の負の連鎖」

フィリピン・マニラ首都圏では、大学を卒業しない限り最低賃金を稼ぐ職に就くことすら難しく、学歴社会の中で貧困層出身の青少年たちが行き場を失ってしまうという、貧富の格差が社会問題の一つとなっている。例えば、幼少期に非政府組織（Non-Governmental Organization, or NGO）や地域の市民団体（People's Organization）から教育支援を受けたとしても、18 歳以上の成人した青少年たちは支援を打ち切られ、大学まで卒業できるケースは限られている。十分な学歴がないまま、働きたくとも雇用してもらえず、収入がないことで犯罪に手を染めたり巻き込まれたりするケースは少なくない。また、貧困層の女の子たちは早期妊娠することも多く、中には 13 歳で出産した事例もある。実際、弊団体が雇用した後、早期妊娠してしまったケースは、雇用した人数の 11%にも及ぶ。早期妊娠の場合、多くは結婚できずにシングル・マザーとなり、子育てと仕事の両立ができず失職してしまう。こうした状況から、貧困家庭で育った青少年たちが再び貧困に陥り、その子どもたちもまた貧困に巻き込まれる「貧困の負の連鎖」が存在している。

フィリピンの貧困問題に対し、数多くのNGOや市民団体による支援活動が活発であることから、フィリピンは「NGO 大国」とも呼ばれ、長年の地道な支援活動により多くの貧困層の命や生活が守られてきた。その一方で、与えられる支援により裨益者が支援に依存し、あるいは支援慣れし、地道に働くことを選択しない「貧困マインド」に陥る負の側面も見受けられる。

フィリピンにて、ソーシャル・ビジネス
「ユニカセ・レストラン」誕生

フィリピンの「貧困の負の連鎖」を断ち切るため、恵まれない環境下で生まれ育った青少年たちに経済面と精神面の自立を促すことを目指し、2010 年 8 月、ソーシャル・ビジネスとしての「ユニカセ・レストラン」をマニラでオープンした。

創立当初は、ソーシャル・ビジネスという概念が浸透しておらず、スタート・アップのための資金援助を依頼しても全て断られる状況であった。しかし、貧困層の青少年たちが働いて自らの生活費を稼がなければ、貧困問題の解決につながらないことを実感していた創立者（中村八千代）は、法人登録や賃貸契約費用・内装費、スタッフたちのトレーニング費用などの創立資金として、1,000 万円の貯金を充当してでも彼らの居場所を確保した。

ユニカセ・レストラン
（2010 年オープン時）

人事面では、学歴を問わず、マニラ首都圏で活動する NGO や地域の市民団体で支援を受けた貧困層出身の青少年たちを雇用し、ビジネスの現場で活用できるビジネス・マナーやコミュニケーション・スキル、日本流のおもてなしや接客などを学ぶ実践的なトレーニングを行い指導した。

スタッフ・ミーティング
（2018 年）

ところが、開店当初は、多くのスタッフが「レストランにいるだけで給与がもらえる」と勘違いし、働くことの意味を理解しておらず、無断遅刻、無断欠勤をしなかったスタッフは、70 名中、たったの 3 名という、冗談ではないかという状況であった。また、会社の資金を盗むなど、社会人としての自覚が著しく欠如していることが発覚。十分な教育を受けられず、社会人経験がない青少年たちの育成を行いながら、同時進行でレストラン経営を両立させることは、非常に厳しい状況であった。

日本にて、NPO 法人ユニカセ・ジャパン設立

行き場を失っていた貧困層出身の青少年たちの受け皿となるレストラン経営を安定させるためにも、フィリピンではビジネスを優先し、青少年たちが 1 人でも多く貧困から脱却できるよう、日本から青少年育成のサポート体制を整えることとし、2013 年 7 月、日本で「NPO 法人ユニカセ・ジャパン」を設立し、「青少年育成事業」を主たる目的として受け継いだ。

ユニカセ・ジャパンの具体的な事業は、英語でプレゼンテーションするポイントを学ぶ「英語研修」や、ビジネス・マナーを習得するための「ビジネス・スキル・トレーニング」、お金のことを学ぶ「マネー教育」など、これまでのビジネスの実践から習得した学びを基にまとめたトレーニングと、食事を通じて様々な非感染性疾患の予防方法を学ぶ「食育事業」を提供しながら、教育機関での講演会やイベントを開催しアドボカシー活動も行っている。

対面式食育イベント

ユニカセ・ジャパンは、フィリピンの貧困層出身者の社会参画と自立を支援すると共に、日本や海外（アメリカ、中国、フィリピンなど）の学生にも事業の企画・運営体験から実践的に学んでもらうインターンシップや On-the-Job Training (OJT) の機会も提供している。

これらの各事業運営をまかなうための資金源は、助成金が 30%、一般寄付やクラウド・ファンディングの支援金が 40%、講演会等の謝礼やスタディー・ツアーなどの収入が 30%となっている。

経済的・精神的自立を支えるユニカセの実績

フィリピンでは、最貧困層出身の青少年たちに学歴を問わず働く機会を提供し、リアルなフード・ビジネスの現場で必要なスキルやチーム・ワーク、責任感を培う機会を創出してきた。レストランでの実地経験を通じて、彼らは単なる技術だけでなく、自分自身を信じる力や、他者と協力して目標を達成する姿勢を身につけていった。その結果、レストランを運営し始めてから 4 年目に年商 500 万円を達成し、損益分岐点をクリアできるまでになった。また、10 年間で 70 名以上の青少年たちを雇用したことで、社会の一員として貢献する成功例、つまり「ロール・モデル」を複数輩出してきた。

フィリピン・メンバー
来日記念イベント

2023 年 11 月にフィリピンにて実施した追跡調査では、70 名のトレーニングを受けたフィリピン人のうち、約 30%がアンケートに回答。そのほとんどがビジネス・マナーやコミュニケーション・スキルなど、ユニカセで習得した学びを活用し、最低賃金の倍以上の月給を稼いで生活を安定させ、さらには彼らの子どもたちの教育機会も確保していることがわかった。彼らの存在は、同じ境遇にある現在の青少年にとって、「自分にもできる」という希望の象徴となっている。

また、日本でも、これまでに 100 名以上の日本の学生インターンを受け入れており、貧困解決のための様々な事業企画や運営を体験してもらい、実践的な事業の知識を身につける場を提供している。

ロール・モデルが次世代を育てる循環

2020 年 3 月から始まった新型コロナ・ウイルス感染症のパンデミックにより、2021 年 2 月にフィリピンのレストランは閉店を余儀なくされた。そんな中、貧困を脱却し、ロール・モデルとして成長したユニカセのフィリピン人スタッフたちが、「貧困の中で自分が経験した苦しい生活を次世代に経験させたくない」「過去にユニカセで学んだことを次世代に継承したい」と声を挙げた。これをきっかけに、世の中の大

きな変化に対応できる人財[1]を育てるための「次世代人財育成事業」の基礎を作り、パートナー団体の NGO の裨益者たちにオンラインで提供するようになった。

現地でロール・モデルたちが貧困地域のニーズを調査し、日本からはインターンやボランティアが必要な情報をリサーチ・提供する形でマッチングさせ、独自のトレーニング内容を開発し、オンラインと対面の双方を用いた持続可能性の高い人財育成事業を確立している。

現場における貧困での課題を深く理解している当事者であるロール・モデルたちが、ユニカセで培った学びを自身の出身地で広め、自らの成功体験を共有し、次世代がより良い未来を築けるようにサポートするこの循環は、コミュニティ全体のエンパワーメントにも強く繋がっている。参加者が主体性を持って行動するための第一歩を踏み出しており、地域社会全体の持続可能な発展にも寄与している。自身の経験を基に、次世代の青少年たちに働きかけ、知識や知恵を伝えるロール・モデルたちの姿は、私たちの活動の新たな展開を象徴している。

「社会貢献者」授賞式
（ロール・モデル 3 名と
八千代さん）

2024 年 12 月、「社会貢献者」として受賞

社会課題や環境問題に取り組む団体や個人に対し、毎年、公益財団法人社会貢献支援財団が「社会貢献者」を発表しており、2024 年 12 月、ユニカセ・ジャパンが受賞者として選ばれた[2]。これまで質にこだわり、確実に一人ひとりを育てる草の根活動を継続した結果、フィリピンや日本でロール・モデルを輩出している実績が評価された。

なお、貧困を脱却した成功例として、フィリピンからユニカセのロール・モデル 3 名が、2024 年 12 月 1 日と 2 日、帝国ホテル東京にて開催された「第 62 回社会貢献者表彰式典」に招待された。この 3 名は、それぞれ「貧困地域で生まれ育ち、小学生の頃からごみ山でリサイクル品を探して生計を立てるスカベンジングをやっていた」、「貧困により幼い頃から児童労働を強制させられ、親の虐待を受けることから逃れ、ストリート・チルドレンとなった」、「幼い頃に父が他界し、視覚障がいがある母の世話をしながら奨学金をもらい大学で学んでいる」といった、貧困が生んだ様々な危険にさらされた経験を過去に持つ若者たちである。今回の来日や帝国ホテルでの受賞式に参加できたことは、まさにシンデレラ・ストーリーそのものではあるが、その背景には彼女たち自身が決して人生を諦めず、努力し続け、また国境を越えて彼女たちを支えてきたサポーターたちの想いがあったからこそ成し得た結果である。

---

[1] ユニカセでは、青少年を「社会の宝」として育成していることから、「人財」と表記している。
[2] 公益財団法人社会貢献支援財団 HP
https://www.fesco.or.jp/ceremony/2024_62.php

草の根の力で未来を切り拓く

ユニカセが大切にしている「草の根」や「量より質」といった言葉に象徴されるように、私たちの活動は数値的なインパクトは大きいものではないかもしれないが、貧困の当事者一人ひとりの人生を変え、14 年の時をかけて育成してきたロール・モデルたちの行動や変化を見ることで、確実に前進していることを証明している。貧困の現場で直面する課題は一朝一夕で解決できるものではない。しかし、地道な努力を積み重ねることで、少しずつ状況を改善し、未来への道筋を作っている。どんなに困難な状況でも諦めず、失敗から学んで立ち上がり続け、現在も最前線で活動を続けるロール・モデルたちの姿勢は私たちの誇りであり、弊団体の原動力となっている。

今後の展望

これからも、それぞれの個性や強みを活かし、ロール・モデルたちが主体的に次世代を育成するための「草の根活動」としてのトレーニングを継続し、貧困層の青少年たちが様々な知識やスキルを実践的に学びながら、成功体験を得られる機会を提供していく。基本的なビジネス・マナーや英語でのプレゼンテーション方法、お金の適切な管理方法など、実生活で役立つ知識やスキルの習得は、彼らの自己肯定感を高め、将来への自信を育むきっかけになる。また、トレーニングの中で小さな成功体験を積み重ね、知識やスキルを体得すれば、彼らはトレーナーとしての役割も得ることができ、本職での仕事の質を向上させることにもつながる。

現在、トレーニングの提供にあたって、住民との橋渡し役を担っている地域単位の行政機関であるバランガイの協力を得ることが欠かせないため、バランガイや教育省との連携を強化している。より多くのロール・モデルを輩出するためにも、私たちの次世代育成事業を持続可能なものとし、積極的に地域社会を巻き込み、行政との密接なパートナーシップを築いていく。

さらに、ソーシャル・ビジネスとしてのユニカセ・フィリピンの再起を目指し、これまでのレストラン経営をはじめ、様々なトレーニングの実施によって積み重ねたデータや知見、暗黙知を整理し始めている。2025 年以降には、ユニカセのロール・モデルたち自身が経営を手掛け、学歴を問わず貧困層出身の青少年たちを雇用すると共に、お客様が心から満足できるビジネスを形にできるよう計画を立てている。将来を担うロール・モデルたちや新たな青少年たちが仕事をする上で、様々な変化に対応し新たな価値を生み出す人財としての自律をより確実にするために、トレーニングでの学びを日常生活の中で活かし、自分のものにする場として広く活用してもらえるような企画を推進していきたい。

「草の根活動」だからこそ、一人ひとりと時間をかけて深く関わり続け、単なる支援者と裨益者の関係を超えた「共創」の可能性を広げることに、私たちはこれからも注力していく。ユニカセで大切にしてきた、長期的な視点で未来を見据えて青少年の行動変容を見守りサポートする姿勢で、今後も未来を担う次世代の育成事業を地道に続けていく。